

昭和六十年

元旦の日が降りてくる鎖樋

葉牡丹に父逝きし夜の明けにけり

雲雀落ち尽し河口の高曇り

強東風や焦げ目の残る芦の節

たつぷりと寝てアネモネの日曜日

質されて子の口ごもる春の雷

矮鶏が木に上手に登り三鬼の忌

忘れもの妻の追ひくる連翹垣

おもたせの鶯餅に雨の客

葉の混んできたるさくらの幹にほふ

葉ざくらの候と書き出し本降りに

曳売のぶつきらぼうに独活を見せ

その中に杭もすつくとかきつばた

駐在所前を駈けぬけ青蜥蜴

黴まじく仁王どんぐり眼かな

亜浪生家跡つばくろの真かがやき

沼尻に雲せり上がり坐禅草

しやうぶ見る腰ポケットに扇子かな

海よりも濃きあぢさゐを操舵室

月見草水平線の上に吹かれ

氷水伊豆見屋と云ふ海の家

わらしべに鯨の吊られて御祭神

施無畏印むくろじ強く地を打てり

仏頭をあづかる寺に鉦叩

水馬総出で水を澄ましをり

元素記号子の諳んずる夜の秋

目の上のたんこぶの兄柿呉れず

豊年の糊のねばりにデコ作り

デコ絵付け関羽の髭のさはやかに

箱河豚に酌みて無月の泊りかな

待宵の濡れ岩隠り蟹の爪

片寄せられ等外の菊白ばかり

握りよき搗粉木選りぬ大師講

くわんのんの手の厚かりき寒さくる

落葉焚午後の落葉を加へけり

臍の緒のごとき句を溜め年逝かす

昭和六十一年

裏山より年を届けにみそさざい

齒朶活けて年入れ替る坊廁

ちやつきらこよくそろひみておちよぼ口

三浦半島長沢左義長

孟宗の雄ごゑおんべの火中より

もうそろそろ山が笑ふと胡桃の木

園児等に鼻振り上手日永象

つつかけに銭湯を出づ芽出し雨

菜飯食ぶ子にまづまづの志望校



茶摘籠腰に弾ませ結仲間ゆひ

柿接木居坐る雲の雨ぶくみ

代搔かれ雀の鉄砲水浸し

長子修学旅行より戻りて

これもこれもこれも土産よ梅雨畳

百段をのぼりつめれば七変化

ほんち捕る子に目つぶしの榎櫃

ほんちは喧嘩蜘蛛のこと

夜色楼台雪万家圖を見て端居

帰省便り玄海灘に友釣ると

どぶ板通りねずみ花火が駈け抜けて

隠元豆摘みかと問へば婆むむと

老人ホームほたるぶくろの道のさき

鯛ノ浦色なき風に鯛肥ゆる

鮑あわびの上あるく鮑よ一遍忌

朝市の牛蒡せり出す寺門脇

鬼無里晴れ稻を刈る音蕎麦刈る音

ひつじ田を田螺のあるく鬼無里晴れ

廊に群る夜長のスリツパ鼠めく

宿の餉にけとばしの出て紅葉季

草の花氷室名残りの上り坂

鳥籠を日向にサトウ八チロー忌

自転車に空気を入るる石踏日和

清浄光寺 一ツ火七句

綿蟲を割つて総本山に入る

滅燈会枯葉の精も加はれる

一ツ火に白道濡れむばかりなり  
びやくどう

白道の左右より咳御滅燈

わらわらと白息称名起りけり

引声念仏畳めつぼう冷ゆるかな

甘酒に六腑の在り処滅燈会

紙飛行機木犀の香によく飛べり

色なき風背に釈尊の出山圖

やどり木に逝く年の眼を止めをり

大マスクとつて白子の味見せり

荒神松買ふにがま口北風晒し  
長梯子何処へ掛けても師走空

昭和六十二年

餅腹にもくれむの芽を見に出づる

臘梅の嫌ふ日向をきらひけり

水仙の葉に水仙の葉影凍み

紅梅を見合のごとく見てをかし

土器出づる山を拓きて桃畠

仙厓円相図

これ食うて茶をのめと まる あたたかや

月高みはくれむ浮力のつくごとし

はくれむに似たれど辛夷で押し通す



修驗道生五倍子の連珠飛び散れり

さへづるは何かと問はれあてづつぼう

散るさくらタイムカプセル埋めし地に

喪の知らせまたありさうよ紫荊

独りごつ男蘇枋の花を過ぐ

身の廻り小出しに詠ひ葉ざくら季

腹這ひに蜥蜴ぬくもる子産石

航海を終へて棕櫚咲く家に居り

蠅生る磯長しながの國の磯歩き

青嵐山女魚焼く火を襲ひけり

朗報を聞くごと新茶味はへり

梅雨籠りあうむにこゑを奪はるる

裾頒けの実梅の山を三つに盛る

閑取に前歩かるる薄暑かな

蘭鑄を揺りて昼の地震ありぬ

西伊豆 田子三句

亀の手といふ貝が出て涼しき餉

かつを船滴る陸くがに戻りけり

浦祭藻を出で入りのべらを見て

花火野郎青嶺の肝を抜き来しと

蝸の申し送りに嶺々昏れて

帰省子の弥次郎兵衛めく手土産に

死ぬは莫迦と告げたる人の墓洗ふ

隣家よりこゑ枝付きの柿貰ふ

のうぜんの盛りや防火講座聴く

海鞘食べて午睡六腑の匂ふらむ

無人店に買ひてすこぶる柿甘し

法要の集りよくてかりんの実

男体と名も佳き山に蜻蛉湧く

下着売るお十夜の灯のらくだ色

十夜僧くわりんのごとき頭をしたり

お十夜の小菊嗅がれて買はれけり

通夜ありて良夜の句会一人欠く

土蜘蛛の撫でやる腹の珍無類

金時山もこもこ雑木紅葉せり

七面鳥ぼろぼろの声発しけり

しかと笹鳴瑞鹿山円覚寺

隣席に日の射し込める年の旅

大年の日を載せ薨屈託なし

国民休暇村一斉に雪雫

昭和六十三年

通るたび橙の木の似合ふ家

六郎の絵の中の子もみかん剥く

大とんど崩れ腹中覗かする

飛びつ切り上等の旭が花木瓜に

鳥入れてさくらのうつらうつらかな

山羊髭の人類学者春を語る

連翹のハハハハと又ハハハハと



空つぽの檻も覗きて日の氷き

腫れぼつたき鯉に寄られてゐる暮春

遊ばれて磯に置き去りあめふらし

うらうらとごうなのあるく漁休み

やどかりも帰り支度の日を浴びて

あめんばう方程式のXなす

椎の香と云ひかけて顔見合せり

門構へ泰山木に負けてをり

波羅羯諦はらぎやてい泰山木の花咲けり

泰山木散る滅却といふ言葉

棒杭の如きをぐいと墨の涼

ねずみもち咲く辺を妻の往き来せり

大茅の輪おろちを跨ぐ心地せり

蚊帳吊草古風な風を送りけり

摘まらずともほたるぶくろの裡知れり

梅の幹くろぐると梅雨待ちみたり

ポポーの木と云ふを植込み夏はじめ

ほたる火に一幹ぬつと現れにけり

昼寢覺とろんと庭木ありにけり

絵団扇のあらかた竹の性抜けて

海鞘好きの客と覚えてゐて呉れし

榊酒に口とがらする夜の秋

八丈島等 九句

飛魚跳んで跳んで水平線退る

われ泳ぐ下にテーブルサンゴ礁

ゆつたりと泊船を入れバナナの葉

すぐあがる雨と知りをりハイビスカス

「当人渡世勝手次第」の島に灼け

喜雨雫カナリー椰子の刺にかな

八丈太鼓教師の打てる盆休

雨落ちて来ぬ流燈のまへうしろ

くろぐろと精霊舟を曳きし跡

明けわたる水に水馬の鉄脚

一驟雨高層ビルを壮とせり

仕舞ひまできれいに苧殻燃えにけり

のうぜんの散らかつてゐる伝心寺

邯鄲を聴きにひきずる下駄の音

気の遠くなるまで蒲団干されけり

菓子折の赤き紐もて菊括る

いつまでも隣家へ木の葉降らせる木

拾ひあぐ落葉に朴の木の遠し

枯柏青天井の何処か鳴る

裸木となりて櫟の鬘鑠たり

懐手する手の無くて大櫟

みかんの皮二つ重ねて暇乞ふ

数へ日の日にまどろめるさるすべり

木々にあり大つごもりの三時の日

二段上の枝に凍みをりもう一羽



根方よりずいと見上げぬ冬櫛

平成元年

投函にぶらりと出づる雑煮腹

臘梅に夫婦二組佇める

初東風にそらまめの茎ぐらつけり

カリフラワー剪られ空あたなる空を抱き

春隣向き合うて立つカンガル―

花冷の河馬の図体ただよへる

建長寺

巨福山梅の活発地こふくかな

清湘老人呼びに遣りたき里の梅

笹子来と云へば目白と正さるる

もくれむの散り下手堀の内と外

暖雨去りうぐひす餅のやうな島

古草のそこらへ坐り給へと云ふ

くるぶしの風に乾ける磯遊び

連翹の枝の跳ね出せる道普請

竹の葉の降るになかなか昏れぬなり

そら豆の莢突き出せる島の道

たあいなく風につまづく鴨足草

あぢさゐをびいどろ色の雨つつむ

相撲草強く吹かれて立ち直る

坐をすこしずらせば見ゆる夕顔棚

照り返し強し鰻の日の舗道

雨弾き弁慶草の葉にちから

秋さくら川を優しく曲げにけり

繰上げて海晴るる日の七五三

畢